

資料研究

忠魂碑

会員 山本 係

山内武藏先生の「飛行機物語」は、楽しく読ませてもらった。アポロ一号の月旅行を考へる時、日進月歩の感慨がふとあつた。

ちかぢか、靖国神社を國家として護持すべきと云ふ運動が押し進められ、その立法化の動きが出てきました。これと関連して佐伯市内にある二、三の忠魂碑、記念碑などについて触れてみたいと思ひます。考察の採り所として、歴史年表を掲げます。

年号	事	項
大正十四年	首相 加藤高明。	軍縮ムード起る。(海軍大臣田代三吉の廃止)
	ラジオ放送始まる。	
十五年	首相 若槻礼次郎。	
(昭和元年)	海峽(八幡)に日本セメント工場できる。	
昭和二年	首相 田中義一。	山口県岩国で帝人か人造絹糸製造開始。
		八幡の忠魂碑建立。
三年	最初の普通選挙行なわれる。	
	岡東軍の左の張作霖爆死す。清事変止る。	
	高知県桂浜に坂本龍馬の海援隊の銅像建立。	
	鶴岡の忠魂碑建立。	

昭和四年	毛利高政(初代佐伯藩主)贈位宣命(後三改)
	高知県室戸岬に中岡悳太郎の銅像建立。
五年	海軍軍備制限縮小に調印。
六年	首相若槻礼次郎、大養毅。
	満洲長春郊外の中国、朝鮮の農民衝突。
	満洲事変起る。
七年	上海事変起る。満洲国承認。
	五、一五事件。首相犬養毅暗殺される。
八年	下笠田村桐江に青木雅比古の碑建立。
	首飾松岡洋右佐伯駅通過、国際連盟脱退。
	独歩碑建立。
	甲中支隊記念碑竣工(大分市)
	上笠田村忠魂碑建立。
	丹賀要塞完工(東予南村)。
九年	忠犬八千公の像建立。
	佐伯海軍航空隊創設。首相岡田啓介。
	國産トランプ一号誕生(トヨタ)
一〇年	首相広田弘毅。二、二六事件(斎藤実内相、高橋是清蔵相殺される)。
	日独防共協定締結。
一二年	首相 林仙十郎、山本文麿。
	トヨタ自動車工場完成。日中戦急勃発。
	佐伯、岩国等に海軍防備隊設置
一三年	日ソ兩軍衝突
一四年	首相 平沼騏一郎、阿部信行。佐伯市長、ノモンハン事変
一五年	首相 米内光政、也衛文麿。
	仏領インド支那(北部)進駐。
	日独伊三國同盟。中国汪兆銘政権誕生。
一六年	首相近衛文麿、東條英機。佐伯市誕生。

右の年表は、大正十四年（一九二五年）より昭和十六年（一九四一年）迄のもので、年代順に従つて年々進みます。

① 西南の役に明治十年二月、湖戦にありましが、同年五月三十一日於三重に戦死した小倉歩兵第十四聯隊第二大隊第一番中隊七分隊副司率太郎二等兵（二四才）の神祠作りが墓が、弥生新大向にあります。正式な墓は大分市松栄山の招魂所にあります。

② 西南の役に關係した「東京警視救急隊戦死之碑」が佐伯市白坪の陸軍墓地にあります。明治十一年十月三日建立。碑文は中村正直撰、大庭永成書す。

③ 同じく、西南の役戦死碑（墓碑一四八基）も、そこにあります。

碑の正面上に「敵愾」という故陸軍大将一品大勲位有栖川熾仁親王（廣兒馬賊徒征討總督）の崇奉による文字と、正六位勲四等秩月新太郎撰並書による銘文が刻及にまけています。

④ 高野金作の記念碑（日清戦争關係）が、佐伯市星宮海福寺墓地にあります。明治二十八年六月建立。

（正面文字）

高野金作君戦死碑

征清復起、高野金作君 属第六師團歩兵第二十三聯隊第一大隊、戦於清野山東省摩天嶺勇闘死之。君水姓高治、豊後國南海部郡鶴望村人、父六太郎、母山口氏、君山嗣高野氏、宛時二十七日、宣明治二十八年一月三十日也。君為人質、直其臨戦也。救往不撓死也、皆惜之。

芳

抑征清之役、為東洋救難而君死於義、嗚呼人詎死、死而榮、君可以顯矣。

銘曰 桓々高君、一片之君、千古遺流、明治二十八年六月

正五位子爵 毛利高範扁額

文部省参事官従四位勲四等秩月新太郎撰

前切心 現養賢 天慧書

（碑文下面右横書） 鶴岡村有志者

備考

句讀点、段落は、右左し自身の辭表で讀みやすいように付けました。

日清戦争は、明治二十七年八月一日に始まり、明治二十八年四月十七日に終つています。（戦争八か月間）

六月後の四月二十三日には、遼東半島を還付せよと入三國干涉（独、露、仏）が起りました。戦争終結二か月後下、この記念碑が創建されています。

海福寺には、青木猛比古が伴僧（小僧）として仕んでいたことがあります。

⑤ 日清戦争（台湾征伐）に従軍して、明治二十七年九月二十四日戦死した川野良治近衛兵の記念碑が、佐伯市鶴岡、竜護寺境内にあります。明治三十年十月建立（鶴岡村有志により）。

（正面文字）略

陸軍歩兵大佐従五位勲三等功四級福島安正篆額（シベリヤ横断の勇將、後の陸軍大将）

（東京）女子高等師範学校校長従五位勲三等秩月新太郎撰書

⑥ 佐伯市門前広慶境内に、火のような碑が建てられて

八丈才。明治三十七年十二月建立。

(裏面文字)

任露役起、溝口喜一郎君、属第一軍第六十二師團、  
戦於清國奉天省土門子奮闘、死之時二十四、安國治  
三十七年十月十二日也。

君南郡鶴岡人、其在学也孜孜不怠、其操履也重教  
不撓歎也。人皆惜之。

抑此役祖国安危所繫、而君友於義可謂有深矣。安  
比有志和謀、為君建碑、需余文乃次第之如右。

明治三十七年十二月

鶴岡小学校訓導校長深矢恭次郎撰書

石工 深矢治三郎

(碑正面右側書) 門前連中

(表内文字)

日露戦役以来大東亞戦争ニ至ル迄、名譽  
ノ戦死ヲ遂ゲラレトシ門前区出身者、氏名  
ヲ左記ス。

溝口喜一郎	上杉勝幸	之
井上 正	松本 勇	建
能込貫一	岩本新夫	古
甲斐滝雄	岩木藏雄	州
河野正義	古谷藤吉郎	年
川野 繁	藤口伊助	32
川野 要	宮本健一	和
梅田隼美	宮本由己	門
梅田正明	森矢助男	池田
		實
		藏書

備考

日露戦争及、明治三十七年二月一日開戦にありしに  
外、溝口喜一郎君及、同年十月十二日戦死し了した。同  
年十二月記念碑建立。明治三十八年九月五日戦争が終

川まし去。戦争期間一年七ヶ月。

⑧ 八幡村忠魂碑

佐阳市海崎、大宮八幡宮祠下の衣場にありす。昭和  
二年四月二十九日建立。

碑文、大分県立佐伯中学校長

今村孝次撰

帝自在郷軍人会八幡村分会会員 建

松尾角藏書

⑨ 鶴岡村忠魂碑

佐伯市星宮、聖山下にありす。昭和三年四月建立。

(正面文字)

忠 魂 碑

正三位勲三等子爵 毛利高純書

(左側面文字)

天之所、微地之所、載人之所敬慕。太平忠、臨則家  
有勇、義勇奉公、奮戰殞命者忠要。木平之我御人  
軍籍、從清露二復之出証、御命於戰場、敵國之至  
誠者、前後十○○○○○○○○使御人奮起、為身奉  
公之精神者長大也。  
在御軍人会○○○○○○○○於不朽、且效鎮將  
來、為國家致命者之忠魂之識、而村○○○○○○○  
○○○文字、予因記才碑、是護之主服與焉云爾。

昭和三年四月

鶴岡 佐藤藏太郎撰  
羽峯 深矢恭次郎書

(裏面文字)

昭和三年四月

帝自在郷軍人会鶴岡村分会 建之

備考

五侧面ノ文字はコケにまみれて不明、しかも碑が高くそぐえてゐる左め、読解が困難でした。句読点、段落などは読みやすいように独断で付けてみました。その道の専門の人のご指導を仰ぎたい。同地には寄附者芳名ノ石碑もあります。

㉔ 上堅田村忠魂碑

佐伯市下城、城八幡社境内にあります。昭和八年九月建立。

(正面文字)

忠魂碑

陸軍大将 南次郎書

(側面文字)

昭和八年九月奉建

帝國在郷軍人会 上堅田村分会

上堅田村青年団

㉕ 下堅田村忠魂碑

佐伯市下堅田村小學校前にあります。昭和三十年三月建立。

㉖ 青木猛比古ノ碑

佐伯市柏江、徳野神社参道脇にあります。昭和七年五月建立。

(正面文字)

勤皇

志士 青木 猛比古ノ碑

従四位 魚三 等 文字博士 長 壽吉

(裏面文字)

昭和七年五月

南海新報教育会 建之

㉗ 佐伯市小寺、養賢寺前には、観音像が建てられてゐます。

慈眼視衆生という正面と大日本国防婦人会佐伯分会、昭和十四年十月三日と刻まされた左一對の花筒だけが印象的です。これだけで研究の手がかりがつかむことができませんが、佐伯市の忠魂碑をつたうてはなつかしく思われます。

㉘ 切畑(村)にも、忠魂碑が、休生所立切畑小學校の裏山に建て立っています。

佐伯市、南海部郡各町村の忠魂碑を調査してみることも興味深いことです。

佐伯市は、昭和十二年、鶴岡村、上堅田村を合併し、昭和十六年、大八高村、八幡村、西上南村を吸収して佐伯市制をせしました。さらに昭和二十年、青山村、下堅田村、木立村を編入して今日に至っています。

第八代高司正造町長が、佐伯町最後の町長でした。昭和十六年八月十二日、初代御田部安中市長就任、二代西面卓市長、三代安藤正入市長、四代矢野龍雄市長、五代出納副三郎市長、現地田利明市長は六代目になります。誌がよそ道にそれまゝです。

昭和二年八幡村、昭和三年鶴岡村、昭和八年上堅田村には、それぞれ帝國在郷軍人会分会による忠魂碑が建立されています。佐伯市養賢寺前の観音像前の花筒の、大日本国防婦人会佐伯分会の文字は、なつかしい、且つ思い出深いものです。

他方、昭和三年坂本龍馬、昭和四年中野恒太郎の各銅像、昭和七年青木権比古の碑が建立されていす。坂本龍馬の銅像などは、地域、青年団によつて、青木権比古の碑は、南海部郡教育会によつて造られていす。

そればかりではな、郷親はさしひかえすが、歴史年表、碑文などを充分読んで、各自の推測、判断を下していただく方がいいと思ひます。

ともかく、昭和の初期は、おれわれ日本人が、アジアに世界に一つの理想を抱いて、勇往まゝ進んでいた、いはば日本興隆の時代であつたのでしよう。

おれわれは、昭和元祿に生をうけてゐる者は、忠魂碑、記念碑の碑文をいま一度読みなおして、西遊之後、日清日露戦争、太平洋戦争に戦死された方がたに感謝を捧げることも、その冥福を切に祈らざるを得ません。現代の繁栄も、英霊の御加護によるものと思ふられます。(終)

踏査記

石神峠を往く

高 水 嘉 吉  
(会員・佐伯市藤原)

石神峠を境として佐伯市黒沢と、宮崎県北浦村三河内と結ぶ林道が洞通して、車か通れるようになつたので、と踏破したいと念じていたが、やつとその機を得て、七月二十日長男に車を運転してもらつて出かけた。赤矢勘藏、岩田正城両会員に同道して、い左をいて、赤井と説明をお願ひした。此の道は陸路峠の道と共に、古末三河内と佐伯地方を結ぶ要路であつた。

舟形で富辰神社を拜して佐伯治と徳次、大永の昔惟治主従二十余名が、狐影悄悲と日向落ちた足跡を左どリつた車を連れた。立派な道が洞通して、い左か末を踏面か固まつておらず、先般の長雨で路肩の崩れてゐる所もあつて、一寸ふやふやする所もあつたが、先ず順調に峠に到着した。天気はよい筈であつたが、ちどりのい左峠は細雨で煙つていた。ここで赤矢会員の説明してもらひながら展望する。

唯治主従が三河内落の前にはらく定まらずと伝えられた馬場の尾は、深谷へ入つて右方指呼の間に望見される。羊腸の新道と並行して左方山のオハネに旧道が續いて、新道の峠は殆んど同位置である。三河内側は水口、大井を経て中心地梅水へと道が通じているわけである。

峠からの眺望を十分楽しんで、三河内に向つた車を進めたが、しだり下るとかじ雨の水たまり道がふさがれて行先をばかまげらる。三河内に心を残しながら引返すことになつたが、石神峠を踏査したをけて一応満足した。要は唯治主従の最後の足取りを探るための此行であつたので、以下若干の事について考察して皆さんに御批判と御意見を伺ふ所である。佐伯の町から西へ、三河内へ、大井へ、岩田正城の地蔵堂へ、古末三河内へ、黒沢へ、西野へ、山形へ、石神峠へ、梅水へ、古江へ、尾高へ、

西野の道

